

## 藍田勝郎さんを送る

2020年12月9日—葬儀の日—

「よくよく言っておく。一粒の麦は、地に落ちて死ななければ、一粒のままである。だが、死ねば、多くの実を結ぶ。自分の命を愛する者は、それを失うが、この世で自分の命を憎む者は、それを保って永遠の命に至る。私に仕えようとする者は、私に従って来なさい。そうすれば、私のいる所に、私に仕える者もいることになる。」

(ヨハネによる福音書 12章 24～26節)

藍田勝郎さんが召されました。わたくしにとって  
は2000年4月に柴川勝利さんが召された時に次ぐ、  
突然の教会員の死でした。「死と呼ばれる刈り入れ  
人」の容赦ない一撃に心折られる思いです。

藍田さんに神さまが貸し与えられた地上の時間は  
66年と9ヶ月でした。

ご家族にお伺いしたわけではありませんので正確  
を欠く部分や間違いもあるかもしれませんが、兄弟  
の歩みを振り返って、藍田勝郎さんを思い起こし、  
涙の糧、また信仰の記念といたく願います。

式辞（藍田勝郎さんの略歴）

- 1954年3月7日 生まれ、常滑で育つ  
実家は著名な医院  
常滑中学校で榎本久美江に音楽をならう
- 1972年12月10日 農協会館で行われた市内合同クリスマスにハレルヤコーラスで参加（高校3年生）
- 1973年12月23日 半田教会で行われたクリスマス会のハレルヤコーラスに参加以降、半田教会から離れることはなかった。
- 1974年 再開された青年会書記となる。  
会長の榊原善夫とともに青年会のけん引役として活躍  
教会学校教師としても活躍
- 1980年4月 名古屋市千種の舟橋オーディオセンターに就職（26歳）
- 1981年12月20日 受洗（27歳）
- 1987年3月22日 諏訪典子姉と結婚（33歳）、  
智之さん、耕平さんの二男を与えられる。
- 2003年 ふたたび教会学校教師となる  
同じころ 舟橋オーディオセンターより独立 Audio and Visual Aida 起業
- 2014年 役員となる（60歳）
- 2020年12月7日 召天（66歳）

藍田勝郎さんは1954年3月7日に出生、常滑で育たれました。父親は現地では有名な開業医で、藍田さんは上に姉ふたりをもつ念願の男の子でした。医院を継がせたいというご両親の思いもありまして常滑中学、愛知学院卒業後、国公立の医学部受験に励まれましたがこの扉が開かれることはありませんでした。結果、医学の道を断念し、1980年4月より名古屋市千種にある舟橋オーディオセンターに就職されました。藍田さんが26歳の時です。藍田さんは皆さんも知る通り、音楽に造詣がふかく特にクラシック音楽を愛好されました。半田教会とのつながりのきっかけとなったのも、1972年、藍田さんが18歳のときに当時行われていた市内合同クリスマスにハレルヤコーラスを歌うために来会されたことによります。100周年記念誌によると「指導にあたった榎本久美江が当時のCS中学生、高校生に勤務先の中学校コーラス部生徒を数人加えてテコ入れし、演奏にこぎつけた」とのことです。40名ほどが参加したといえます。藍田さんは中学校時代に榎本先生に音楽を習っていたそうですが、それから3年近くたっていますのに声をかけられて参加したあたり、榎本先生の引きも強かったのでしょうし、本人の音楽好きもあったのでしようが、やはり神さまの選びがあったのだと思われてなりません。このハレルヤコーラスは好評で、以降、半田教会のクリスマスの定番となり、現在でも歌い継がれているのはご存じの通りです。しかし、2年目のクリスマスに今度は教会でやるからと声をかけられて参加したのは藍田さんともう1人しかいなかったそうです。1973年の

クリスマスのことです。1974年には、おそらく紛争の影響を受けて1970年から休会状態だった青年会が榊原善夫会長のもとで再開され（ちなみに善夫さんは藍田さんと1週間違いの同年です）、藍田さんは青年会書記を務められます。1980年に就職してからは火曜定休だったために教会出席が難しくなり、一念発起して1981年のクリスマスに受洗をしています。生涯の伴侶となる諏訪典子さんとも教会で出会っていますので藍田さんにとって半田教会は神さまと出会い、牧師と出会い、仲間や、子どもたちと出会った大切な場であったことが分かります。30代半ばから50歳直前までの藍田さんは仕事が忙しく、教会生活を送ることが難しい状態でした。転機は、独立前後、2003年度教会学校小学科に復帰してからで（49歳）、持ち前のユーモアと明るさで「あいだっち」の名前で子どもたちに慕われました。それは最後まで変わることがありませんでした。思い起こせば、近年、転倒や怪我の多かった藍田さんでしたが、誰も今回のような事態は考えもしませんでした。詳しくは聞いておりませんが12月4日（金）に、心筋梗塞で倒れ、半田病院集中治療室に入院、一度も意識を取り戻すことなく7日（月）午後3時に、主の御許に召されました。66歳でした。

## 奨 励

藍田勝郎さんは篠田潔・秀子牧師夫妻の「6番目の子ども」でした。1973年、二度目のハレルヤコーラスに教会を訪れたときのことを後年ふりかえって、「その時、篠田先生から、待っていたよ、と声をかけられたのが転機だったと思う。大人の礼拝に出て、祝会にも残り、そのまま半田教会にはまっていった」と語り、この時に篠田先生から「人と人との出会いは悪いことはひとつもない。最初はどうとましく思っても、きっと後で良かったと思うことがあるよ」と言われたことが生涯の導きの光となったと述べています。これが19歳の時です。以後、青年会活動や教会学校など、教会にどっぷりはまっていった頃には篠田家の食卓の箸入れには藍田さん専用の箸があり、夕食を食べないで帰宅すると、なんで教会で食べてこないの！と母親から怒られたといえます。お世話好きの篠田秀子夫人の姿が目に浮かぶようです。晩年、篠田先生ご夫妻がまきばに移られてからも、仕事が独立して時間が自由になっていたとはいえ、都合147回、のべ600人ほどを連れて、まきばを訪問されたのは年寄り子で両親を早くに亡くしたと仰っていた藍田さんの「信仰の両親」への献身でした。また今回召されるまで1年8ヶ月ほど欠かさず、常滑に住む姉の許に昼食夕食を作りに行っていたのも藍田さんの心根を思わせます。本人の弁によれば「わたしのやっていることの多くは自分の父親の背中を見て身についた。～人に何かをすることが好きな人だった。病院に夜間往診を頼む電話がかかる時も、

相手は母ではなく、父に替わってくれという。父が断らないと知っているからだ。～そんなふうに生きてきた父を思うと、やれることはやろうという気になる」と述べています。にぎやかなことが好きで、人を楽しませることが大好きな人物でした。とくに子ども好きで教会学校教師としての子どもの楽しませ方は他の追随を許さず、夏期伝道実習に毎夏おとずれの神学生たちも殆ど出番がありませんでした。教会学校に70人以上が来ていた時代を体験していた藍田さんは少子高齢化により、教会学校に来る子どもも少なくなったことを気にかけて、声かけを行っていました。またオーディオ関係の本業は、景気に大きく左右されるものですから、そちらの方面からも時代の移り変わりを敏感に捉えておられ、ここ10年ほどは年を取って立ち居振る舞いが困難になったかつての顧客の依頼を丁寧に受けておられました。「電気が故障した」と言われて飛んで行ったら「便器の故障だった」という普通の人なら怒ってしまうようなこともユーモアにくるんで話される人でした。「僕の仕事は、仕事2割、雑談8割ですよ」と話されていたのを思い出します。皆を笑わせ、痒い所に手が届く仕事ぶりでした（わたしを含めて、これからどうしたらいいのかと困惑するみなさんの顔が目には浮かびます）。お客さんを大事にし、お客さんからも愛されました。その根底にあったのは冒頭述べた篠田先生のことばと聖書の教えでした。受洗志願の文章から少し長いですが引用します。

「仕事の都合で日曜日もなかなか休むことができず、礼拝に出席できなくなりました。～礼拝に出席

できないことが、どんなに自分にとって苦痛なのか初めて気づきました。仕事上、色々な人と毎日接します。イヤなこととも言われます。自分が悪くないのに、あやまらなくてはいけない時もあります。そんな時には、神様はすべてわかっていらっしゃるんだと思うと、少しも腹が立たないばかりか、むしろ素直な気持ちになれます。そんな自分は、いったい何によって今のようになったのだろうかと考えれば考えるほど、神様ぬきではありえないのではないかと思います。本当は人一倍孤独に弱く、どう考えても的確な判断力をもたない自分にとって、キリスト教的な物の考え方は、非常に大切な力となってくれることばかりです。聖書を読んでみると、聖書では、対立する物の考え方の両側のどちら側に対しても、決して切り捨てることなく、暖かく、時には厳しくします。また登場する人々は、偉大なところばかりではなく、みにくいところも持ち合わせています。そして人間がずるく、計算高く、どんなにいやらしいか、ということもはっきり納得した上で描かれています。まるで自分の事か思うことが数多く出てきます。そのたびに、神様はどんなものに対しても、深い愛を持たれて接しているのだから、僕みたいな者に対しても同じ様な愛を持たれているのではと感じます。ですから、このまま中途半端な状態で教会と結びついているよりは、少しでも神様に献身し、また毎日の生活が神様に感謝してゆくことができればと思い、今回受洗を志願した次第です。」

藍田さんは教会が楽しかったから、その楽しさを教会学校の子どもたちにも伝えたいと願っていました。

た。人に仕えることを働きの中心に据えていました。それは根底に受洗志願の文章中で見て取っておられたように、愛されていることに気づかされたからこそ、愛する者へと変えられたことが大きいと言ってよいでしょう。藍田勝郎さんはゆたかに種を蒔いた人でした。昔の映画ですが、人は人に与えたものしか天国に持ってゆけないと諭した映画がありました。本当にそうだと思います。

最後に、これを読んでくれている若い人にとっておきたいことがあります。またこのことが理解できない小学生たちには親御さんが理解できた範囲で伝えて下さればと願います。今回の藍田勝郎さんの突然の死を受け入れられない人もいるでしょう。思いの強さは異なりこそすれ、わたしも同じ気持ちです。けれども、死が、理不尽でなかったことなど一度もないのです。そして死なない人間もいないのです。だからこそ、一度限りの二度と繰り返すことの出来ない神さまから与えられた命をどのように用いるかが、メント・モリ（汝、死すべき存在であることを記憶せよ）ということが大切なのです。この知恵を教会生活で学んで欲しいと願います。そしてわたしたちのために十字架にかかり、復活されて、罪と死の支配を終わらせてくださったイエス・キリストの恵みに思いを馳せて頂きたいと願います。この方はアブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神であり、イエス・キリストの父なる神であり、そして藍田勝郎さんの神でもあったのです。その神の許で、兄弟が示してくれた良いものを受継いでいくことが藍田勝郎さんの願いでもあると知ってほしいのです。

「よくよく言うておく。一粒の麦は、地に落ちて死ななければ、一粒のままである。だが、死ねば、多くの実を結ぶ。自分の命を愛する者は、それを失うが、この世で自分の命を憎む者は、それを保って永遠の命に至る。私に仕えようとする者は、私に従って来なさい。そうすれば、私のいる所に、私に仕える者もいることになる。」

主イエスの御許に国籍を移された藍田兄弟を偲ぶとともに、地上に残されたご家族の歩みを祈りに覚えて頂きたく願います。

お祈りをいたします。

神さま

別れはいつも突然で、わたしたちを打ちのめします。特にご家族の嘆き悲しみはいかばかりかと思えます。どうか大切な宝をあなたにお返しした残された家族の者たちを守り導いて下さい。

また兄弟に深く結びついていた者たち、特に教会学校の子どもたちの心と魂をあなたが守り導いて下さい。キリストの復活の光の許で、すでに兄弟は平安のうちに守られていること、やがて御国で見える希望が与えられていることを信じさせてください。悲しむ者の慰め主イエス・キリストの御名によって祈ります。

アーメン



2020年11月22日（終末主日）撮影

藍田さん、お疲れさまでした。本当にありがとうございました。

皆の気持ちを代表して

半田教会 横山良樹